

『屏風土代』を読む

——大江朝綱の漢詩をめぐって——

本 間 洋 一

はじめに

延長六年（九二八）、当時大内記であった大江朝綱は下命に依り内裏御屏風絵六帖に題する漢詩を作った。それを少内記小野道風が清書に先立って下書きしたものが今日世に伝えられている所謂『屏風土代』である。これ迄疑いなき道風の書蹟として喧伝され、多くの刊行物に書影が掲載されてきているが、漢詩全体については十分な検討がなされているとは言いがたいよう

だ。その意味で近時丹羽博之氏が試みた白居易詩の影響の検証^{〔1〕}は大いに意義のあるものではあったが、十一首全体の詩や訳を組上に載せるに至らなかったのは惜しまれる。稿者は日本漢文学を学ぶ傍ら、聊か書に遊ぶ癖を持ち、これ迄幾度となく手習

い臨書にこの『屏風土代』を採挙げたことがあった。その度に疑問に思っていた本文の一端について旧稿^{〔2〕}に記したこともあるが、以下では七律八首七絶三首の注解を試み大方の御批正を受けたと思う。猶、以下で検討する漢詩の本文は『大日本史料』（第一編之六）の翻刻本文（但し、旧字体ではなく現行の字体）を基本にしているが、書影（清雅堂版コロタイプ〔昭和四十六年刊〕等）の諸書も披見確認している。

—

春日山居 春日山居

古洞春來对碧湾 古洞 春來りて 碧湾に對す
茶煙日暮与雲閑 茶煙 日暮れて 雲と与に閑かなり

山成向背斜陽裏 山 向背を成す 斜陽の裏

水似廻流迅瀨間 水 廻流に似たり 迅瀨の間

草色雪晴初布護 草の色は 雪晴れて 初めて布護し

鳥声露暖漸綿蠻 鳥の声は 露暖かにして 漸く綿蠻たり

誰知圯上独遊客 誰か知らん 圯上に独り遊ぶ客を

疑是留侯授履還 疑ふらくは是れ 留侯の履を授けて還るな

らんかと

この詩については既に旧稿で言及している。ここでは、第六句末尾は「綿蠻」と本来あるべきなのに、書影では「綿蠻」に作ることの疑問を中心に述べた。若干補足すると、『屏風土代』の朝綱詩は藤原公任の撰に成る『和漢朗詠集』に八聯も摘句されているが、本詩について言えば頷聯（巻下・山水五〇八）・頸聯（巻下・草四三八）の四句が所収されて、恐らく相当に注目された作であったことが知られる。堀部正一（『校異和漢朗詠集』大学堂書店・昭和五六年七月）の校異にも見えているように、現存最善本としてよく知られる御物本（伝藤原行成筆粘葉装二冊本）でも実は「蠻」ではなく「蠻」に作っている。つまり廻りうる最も古いと考えられる本文は共に「蠻」（朝綱には納得し難い本文だろうと稿者は臆測する）なのだということ

を改めて確認しておきたい。

また、通釈については、「(久しい歳月の経過を感じさせる) 仙界を思わせる俗外の地に春が訪れ、(山中の庵、或はその住人は) 美しいみどりに澄んだ入江の方を向き、茶を沸かす煙は夕暮れ時に棚引く雲と共にのどかに立上る。夕陽を受ける山並は明るく照らされる処もあれば暗く翳る処もあるというたたずまいであり、滾つ早瀬あたりでは、川は逆巻き流れ上るかと思われるばかりである。雪が晴れ(春となって地上の雪が消えるにつれ) て美しい草の緑は見渡す限りに拡がり、朝方に下り敷く露の春らしく暖かくなるにつれて、鳥(鶯を意識している) の声もいかにも楽しげに聞こえ来る。土で造られた橋のほとりに一人散策する人物のことは誰も知るまいが、ひょっとしてあの留侯(張良) が老父に履を拾ってはかせてやって帰る、ということであろうか」という程の意とした。

ここで表現や語彙について若干付記しておきたい。「古洞」「碧湾」は存外用例稀な表現かも知れない。洞は仙洞のイメージを揺曳させ、碧は美しく澄んだ世界を表象することが多い。この山居が塵垢に塗れた俗世と隔絶していることを暗示する。また、周知のように中国の喫茶詩は唐代によく見えるようにな

り白詩にも少なくない。本朝では勅撰漢詩集以後まゝ詠まれるようになる。「蕭然幽興処、院裏蒔茶煙」(嵯峨天皇「秋日皇太弟池亭賦」三字)『凌雲集』は比較的早い「茶煙」の例の一つだが、皇太弟池亭はいわば俗外の清澄な空間であつたららう。「客至茶煙起、禽婦講席收」(劉禹錫「秋日過鴻拳法師寺院便送歸江陵」)「六時仏火明珠綴、午後茶煙出翠微」(章孝標「題碧山寺塔」)「千載佳句」巻下・寺一〇二七)等、唐代詩には寺院題の詩に点綴されていることが少なくないが、そこが俗外の静寂清澄さを有する場であつたからに他なるまい。「与雲閑」については丹羽氏が「静將鶴爲伴、閑与雲相似」(和「裴侍中南園静興見示」)『白氏文集』巻六三・三〇二二)との類似を指摘し、「独遊」も白詩によく見える語とするが、その他でも恐らく「向背」「斜陽」「草色」「鳥声」「誰知」「疑是」等は——ありふれた語彙だが——白詩によく見える語彙と言つて良い。「水似廻流」には「百川未_レ有_レ廻流水、一老終無_レ却少人」(「春去」)『白氏文集』巻一七・一〇三二『千載佳句』巻上・老五三一『新撰朗詠集』巻下・老人六七六)が意識されているかも知れない。つまり、白詩の表現は以下の詩でも強調するように基本の一つと言つて良

いだらうが、勿論それのみではない。稿者は「迅瀬間」に道真の「松低」老葉「危巖下、水噴」寒花「迅瀬間」(「衙後勸諸僚友共遊南山」)『菅家文章』巻三)を想起したり、敷き施す意の「布護」(或は護は漫に作るべし)が『文選』によく見える語であつたことも喚起されてならないのである。さて、「露暖」は以後本朝詩によく見え一般的表現となっているが、中国古典詩の世界では必ずしもそうではないのではなからうか。勿論「先知」風起「月含暈、尚自露寒花未開」(李商隱「正月崇讓宅」)などと早春に詠まれることもあるが、露は秋のものであることが一般で、清冽さやかなさを示す比重が大きいように思われる。「雨露恩」(自然の恵み・天子の恩寵)などという表現もあり、例えばそこに情愛的ぬくもりを感じとつて「暖」に意味を繋げる脈路迄も否定しないが、少なくとも春の季節と直結する自然表現としては本朝的な色合が濃いのではなからうか。

尾聯の「圯上」(『大日本史料』翻刻の「圯」は否)の故事は所謂「子房取履」(「蒙求」という故事で、張良のことは「史記」(巻五五・留侯世家)『漢書』(巻四〇・張良伝)等にも勿論見え、本朝でも「史記講竟賦」得張子房(「嵯峨天皇、文

華秀麗集』巻中」と採擧げられ、先の故事にしても「孫子張良、彼何物、六韜三略用此春」（空海「贈伴按察平章事赴陸府」）『性靈集』巻二「張良、卷師、万古功名鏐」（大江匡衡「述懷古調詩」）『江吏部集』巻中）などと詠まれてよく知られていたものと言えよう。白詩には張良（子房）の名は見えてもこの故事を詠む句はないようだ。唐詩でこの故事を詠んだ最も有名な作と言え、恐らく李白「經下邳圯橋懷張子房」詩であろうが、本詩の作者朝綱がそれを読んでいたかどうかは不明という他ない。

二

尋春花

春の花を尋ね

見説林花処々開 見説く 林花処々に開くと晨興並馬共尋来 あした 晨に興き 馬を並べ 共に尋ね来る青糸繆出陶門柳 繆 青糸 繆出だす 陶門の柳白玉装成庾嶺梅 白玉 装ひ成せり 庾嶺の梅香迸宜張双袖受 香迸りて 香迸りて 宜しく双袖を張て受くべく花勾偷折一枝廻 あまね 花勾くして 偷かに一枝を折て廻る翻嫌春鳥欺遊客 かへ 翻て嫌ふ 春鳥の遊客を欺いて

空勸提壺不勸盃 空しく提壺を勧めて盃を勧めざることを一首は「聞けば林の花が至る処で咲いているとのこと。そこで朝早く起き、友と馬を並べて花を尋ね来た。すると、柳は芽吹き緑の糸を繰り出す如くで、（その家の柳は）さながら陶門の柳かと思われる風情。梅も咲いて白い玉で飾り立てられたように見えるのは、まるで庾嶺の梅そのものという気がする。花の香りはあたりにあふれ出ているので両袖を拡げて受けとめるも良いし、花弁は一面に満ちみちているので人知れず一枝手折つてめぐり行くのも良い。それなのに春の鳥は花見客を欺いて、ただ酒壺を下げよと囁り促すばかりで酒盃を勧めてくれぬのは氣にくわぬことだ」という程の意。

丹羽氏が指摘するように「尋花」「尋春」などの語は白詩にも見え、確かに「貧家雜草時々人、瘦馬尋花処々行」（贈楊秘書巨源二）『白氏文集』巻一五・〇八四五）などと詠んでいるのも参考になったであろう。「見説」（聞説）「聞道」（同じ）「処々」「晨興」も白詩に見えるが、一般的語彙の範疇に入ろう。騎馬を共にして並び行く意の「並馬」は『万葉集』に「馬並而三芳野河乎」（一一〇四）「馬並而高山部乎」（一八五九）等と見える。が、唐詩では一般的語彙とまでは言えないか

も知れない。

頷聯は『和漢朗詠集』（卷上・梅九〇）に採られた名句。柳枝を糸に見立てるのは「吁嗟細柳、流_二乱_一輕糸_二」（枚乗「柳賦」）「初学記」卷二八・柳「楊柳乱_レ糸、攀折上春時」（梁簡文帝「折楊柳」）『芸文類聚』卷八九・楊柳「などと古くから見え、「青糸」も「准擬三年後、青糸_レ弘_二緑波_一」（種_二柳_一三詠其_二一_一「白氏文集」卷六五・三二一五）「好風倘借低枝便、莫遣_二青糸_一掃_二路塵_一」（楊巨源「賦_二得灞岸柳留_一辭_二鄭員外_一」）とあり、本朝では「青糸柳陌鶯歌足、紅蕊桃溪蝶舞新」（石上宅嗣「三月三日於_二西大寺_一侍_レ宴」）『経国集』卷一〇）が早い例。柳枝は他に千糸・万条糸・緑糸・黄糸・麴塵糸・如_レ糸などと表現されることも多いが、次の「繆_レ出」の語と絡めて考えれば、やはり『千載佳句』（卷上・春興四四）『和漢朗詠集』（卷上・梅九〇）にも採られた「柳糸_レ嫋々風繆_レ出、草縷茸々雨剪_レ齊」（天津橋）『白氏文集』卷五八・二八七五）を意識したものであることは疑えないであろう。「陶門柳」は「宅辺有_二五柳樹_一」（陶潜「五柳先生伝」）の故事に依り、「陶令門前四五樹」（楊柳枝詞八首）其_二一_一『白氏文集』卷六四・三二一九）「陶令門前買_二接離_一」（李紳「柳_二首_一」其_二一_一）などと唐詩にもよく見え、

『屏風土代』を読む

本朝でも「阿誰更憶_二陶潛家_一」（丹治比清貞「和_二菅祭酒賦_一朱雀衰柳_二作_一」）『凌雲集』等以後よく詠まれるものとなっている。「白玉」は白詩にも多く見えるが、梅花を見立てた例はない。同じ手法の一例に「一樹寒梅白玉_二条_一」（戎昱〈又は張謂〉「早梅」）を挙げておこう。また、「装成」は「金屋粧成嬌侍_レ夜」（「長恨歌」）『白氏文集』卷二二・〇五九六）等と白詩によく用いられる「粧成」と殆ど同じとみてよい。か。「庾嶺」は梅の名所の大庾嶺のことで、「大庾天氣冷、南枝独_二早芳_一」（李嶠「梅」）と詠まれる。張方注（『李嶠百詠注』）に「大庾嶺上梅、南枝落、北枝開」と見え、その文はまた「南枝_二大庾嶺上梅_一、南枝落、北枝開」（『白氏六帖』卷三〇・梅）と同文でもあり、二書の關係を考えさせられなくもないのだが、ともあれ、この故事は「坤元錄」（『朗詠私注』卷上・早春一一保胤詩序所引古注）「庾州記」（『文鳳抄』卷八・梅）にも記されていたようだ。勿論白詩にも「庾嶺梅花落_二歌管_一、謝家柳絮撲_二金田_一」（「福先寺雪中餞_二劉蘇州_一」）『白氏文集』卷五七・二七八八）「千載佳句」卷上・雪二九四）と確かに詠まれているのだが、平安朝詩人が好んで繰返し詠んだ程に、六朝や唐の詩の世界では愛用されなかったものでもある。

頸聯の「進」についても白詩に「雪進」「水漿進」「進竹」「淚進」などが見え、本朝でも「始抽進筭排大筆」(「題橘才子所居池亭」)「田氏家集」巻上「進筭未抽鳴鳳管」(兼明親王「禁庭植竹」)「和漢朗詠集」巻上・竹四三三)と繼承する作もあるも、「香進」と嗅覚に用いたのは珍しいか。後年の「経年香進衣開匣」(藤原敦光「早夏言志」)「本朝無題詩」巻四・二五五)は朝綱の表現を受けたものであるう。「双袖」は両袖のことで白詩にも見えてさして珍しい語彙ではないが、「漸扇試張双袖立」「緩吹先入御爐来」(慶滋保胤「風遲花氣濃」)「類題古詩」四六)「吹□追准重陽盞」「張袖重貪往日香」(紀齊名「菊殘秋意留」同上、七五)や「風底香飛双袖拳」「月前杵怨兩眉低」(具平親王「擣衣」)「和漢朗詠集」巻上・擣衣三四九)などの作は朝綱の本句を意識した表現かも知れない。

次の「花勾」こそは本詩中最も気になる部分である。添書している「葩」は「花」と同韻字(麻韻)で訓も「ハナ」で同じであるが、音は勿論異なり、二字は異体字関係でもない。第一句の「花」に続きここでまた「花」を用いることに朝綱は抵抗なかっただろうか(愚考では「花」も強ち否定しないが、「葩」が無難か)。「葩」の添書きは何を意味するのか。朝綱の案稿に

出るものか、それとも道風の書案か明確ではない。更に次の「勾」は何と訓むべきなのか、稿者に決定訓があるわけではない。『屏風土代』の本文翻刻には、丹羽氏のように「花勾」とするものも少なくない。だが、この「勾」字を「勾」(にほふ)と解して良いものかどうか、全く問題がないとは言いきれない。近年の論でも「勾」字が何時どのようにして誕生したのか明らかにしているわけではないようで、稿者も今ここでそれについて論ずるつもりはない。前掲の訓読は「勾〈谷、アマネシ〉」(『観智院本類聚名義抄』法下)と見えるのに仮に従ったに過ぎない。割注の「谷」は、「勾」字の前に掲げられている「勾」の俗字であることを意味している。そして、それ(字様における「ム」と「ロ」の交替)は王朝文人達も用いた『干祿字書』にも見え、異体字資料(字様書や韻書)から窺える異体字派生の類型として何ら問題のない変化なのだが、先の『名義抄』の訓には疑念を抱かざるをえない。その訓は恐らく「勾〈羊倫反、遍也〉」(『王仁昶刊謬補欠切韻』)を反映するものではあるまいか。とすると、先の「勾」は本来「勾」(アマネシ)とあるべきはずのものではなかったかと考えられる。『名義抄』は院政期頃迄の訓読の成果が盛られている字書である。先の「勾・ア

マ、ネ、シ、ン」は一体いかなる書から採取したものなのだろうか。その詮議は多分不可能だろうが、稿者は万に一つの可能性として、この道風書の朝綱詩の訓読に求めてみたいと考えるのである。漢詩人の朝綱が「花勾」でなくして「花勾」と作ったのだなどと安易に稿者は認めることはできないし、彼がまた「花勾」と作った証拠もない。この書蹟が道風の真筆とするなら、先の「繼」同様に、これも彼の瑕疵とされるべきもののではないか。が、しかしその字形と訓みは受け継がれ字書という規範書に登録されてしまった……と臆測したくなるわけである。

次の「偷+動詞」の熟語や花の「一枝」「遊客」も白詩によく見える語だが、何より丹羽氏が指摘するように「提壺」は「厭_レ聴秋猿催下涙_一、喜聞春鳥勸提壺_一」（「早春聞提壺鳥」因題隣家）『白氏文集』卷一六・〇九二六）などに見える白詩に負うところ大きい。白詩が「春の鳥（提壺鳥）が酒壺を下げ飲酒を勧めるように鳴くのは喜ばしいことだ」と詠むのに対して、本詩は「（白詩ではあんなこと言ってるが、結局）酒壺下げなさいと言うばかりで、飲めとは言ってくれてないじゃないか」と絡み戯れているのである。猶、「被_レ催啼鶯斟_レ酒久、好携遊騎見_レ花頻」（輔仁親王「暮春遊西山古洞」）『本朝無

題詩』卷一〇・七六五）などと春の鳥である鶯が飲酒を促すのも右の表現に添うものと考えて良いだろう。

三

惜「残春」 残んの春を惜しむ

艷陽尽処幾相思 艷陽尽きなんとする処 幾ばくか相思ふ
招客迎僧欲展眉 客を招き僧を迎へ 眉を展べんと欲す
春入林帰猶晦迹 春は林に入りて帰り 猶し迹を晦し
老尋人到詎成期 老は人を尋ねて到るも 詎か期を成す
落花狼藉風狂後 落花狼藉たり 風狂して後
啼鳥龍鍾雨打時 啼鳥龍鍾す 雨打つ時
樹欲枝空鶯也老 樹は枝空しからんとして 鶯も也老ゆ
此情須附一篇詩 此の情 須らく一篇の詩に附すべし
一首は「春も終わろうという時、どれ程切なく思われることか。客人を招待し僧侶を迎えて愁いを解こうと思う。春は林に訪れたかと思うと立去ってやはり姿を隠してしまうし、老いは誰も約束してないのに人を尋ねてやってくるのだ。風が激しく吹いた後、落花は地上に散り乱れ、雨が強く降る時には、啼く鳥もずぶ濡れてうち萎れていることだろう。（春も残り少なく

なると) 木々は花を散らして枝もさびしくなり、鶯の声も老いてしまふ。さればこそ残春の心情は一篇の詩に認めておく必要があるのである」という程の意。

残りの春を惜しむ詩は、『落花無限雪、残鶯幾多糸』(「残春詠」懷贈「楊慕巢侍郎」)『白氏文集』卷六六・三二六)「残春好被鶯花送」(四月一日見)三月尽日春被鶯花送之題上不堪威歎作詩加之)『江吏部集』卷下)のように老いの自覚と落花や鶯(黄鳥)と共に詠まれることが少なくない。白詩にも多く詠まれるが、丹羽氏は六十代以降に残春や春尽の作が多いと指摘している。本朝の先行詩としては「三月三日侍朱雀院柏梁殿惜残春」(「菅家文章」卷上)があり、後述するように朝綱の脳裏には道真詩があったと思われる。

「艶陽」は「半百過九年」、艶陽残二日」(三月三十日作)『白氏文集』卷五一・三二九)「欲伴仙園梅李樹、從風灑落艶陽春」(滋野貞主「奉和「詠春雪」」『文華秀麗集』卷下)などに見えるように春のこと。「招客」「展眉」は白詩に頻出する語である。

領聯の「晦迹」は行方をくらます意で、「渭浜晦迹南陽臥、若比「吾徒」更寂寥」(許渾「寄「隱者」」)「大士古來無住著、名

山晦迹老風霜」(嵯峨天皇「哭「寶和尚」」『文華秀麗集』卷中)の如く隱者や玄賓のような縉流のアウトローにふさわしい表現だった。この聯は「春」「老」を擬人化しているが、例えば後者については「樂以忘憂、不知老之將至」(『論語』述而)の言があり、「快然自足、不知老之將至」(王羲之「蘭亭叙」)「不知老將至、独自放詩狂」(洛中偶作)『白氏文集』卷八・〇三七九)「忘老至、計身安」(紀長谷雄「山家秋歌八首」其七『本朝文粹』卷一)のような表現の系譜を惹起させられる。猶、「詎」を誰の意で訓んだが、何の意で訓んでも良からうか。

頸聯は『和漢朗詠集』(卷上・落花二二九)に採られる名高い一聯で、「狼」「龍」の字対が称賛される作だが、楊巨源詩の対を参考にしたものともいう(『江談抄』第四・13)。有名な「落花狼藉酒闌珊」(李煜「阮郎歸」)は朝綱作より後の詠である。「狼藉」「風狂」「龍鍾」「雨打」はいずれも白詩に見える語ではあるけれど、稿者は道真の「狂風第一吹狼藉、叱々忽々意不勝」(「詠梅花」)『菅家文章』卷二)「声寒絡緯風吹处、葉落梧桐雨打時」(九日後朝同賦「秋思」)『菅家後集』とある作にも注目したいと思う。

尾聯の「枝空」には先ず白詩の「前日帰時花正紅、今夜宿時

とも詠んでいた。

枝半空、坐惜「殘芳君不見、風吹狼藉月明中」(「夜惜「禁中桃

花「因懷「錢員外」」「白氏文集」卷一四・〇七四八「千載佳句」

卷下・惜花六七七)「争忍「開時不同「醉、明朝後日即空枝」

(「華陽觀桃花時招「李十拾遺「飲」」「白氏文集」卷一三・〇六二

三「千載佳句」卷下・翫花六七七)などといった作が喚起させ

られる。そして、その下の三字には「事々無「成身也老」」「(「醉

吟一首」其一「白氏文集」卷一七・一〇六四「千載佳句」卷

下・醉八二四「和漢朗詠集」卷下・述懷七五五)もあるが、や

はり稿者は道真の「花已凋零驚又老、風光不「肯為人留」

(「三月三日侍「朱雀院柏梁殿」惜「殘春」)との關係を思わずに

はいられない。先にも触れたところだが、春も残り纔かな頃は

「愁心「暮雨留教住、春被「殘鶯喚「遣歸」」「閑居春尽」」「白氏

文集」卷六六・三二六二「千載佳句」卷上・送春一一〇)

「可「惜鶯啼花落處、一壺濁酒送「殘春」」「快活」」「白氏文集」

卷五六・二六八四「千載佳句」卷上・送春一一二)などと鶯声

と落花に一人心搖さぶられるもののようである。末句の「此

情」も白詩に見え、更に「未「能拋「筆硯、時作一篇詩」

(「自吟「拙什「因有所懷」」「白氏文集」卷六・〇二五八)など

四

林塘避暑

林塘に暑を避く

入林斗藪滿襟埃 林に入り 斗藪す 襟に滿つる埃

看取香蓮照水開 看取す 香蓮の水を照らして開くを

池上交朋唯對鶴 池上の交朋 唯だ鶴に對ふのみ

樹間鋪設不如苔 樹間の鋪設 苔に如かず

境閑客熱辭身去 境閑にして 客熱 身を辭して去り

葉密松風扞面來 葉密にして 松風 面を扞ひて來る

何必古時河朔飲 何ぞ必ずしも 古時の河朔の飲のみならん

殘盃更被晚蟬催 殘盃 更に晚蟬に催さる

一首は「林中に入り身に纏う俗塵を払い落とし、(池のほと

りで)香ぐわしき蓮花が水に照り映えて咲くのを伺い見る。

(さて)池のほとりに交わる友と言えは唯だ差向いの鶴ばかり

で、木々の間に敷き展べられているのは苔。この地は何とも閑

静で、訪れる人の身から暑苦しさが消えてゆき、木々の葉が

びっしりと繁っていて、松風が涼やかに顔を吹き払う。避暑の

飲酒と言えは、古くは河朔の地の故事が名高いが、どうしてそ

の地に限ったことがあろう（この地も満更捨てたもんじゃない）と思いつつ、夕暮れの蟬の声に飲み残しの盃をますます促された次第である」という程の意。

丹羽氏が指摘するように「夏日与閑禪師林下避暑」（『白氏文集』巻六九・三五八三）に類する題といえよう。避暑・納涼は六朝以来数多く、白詩にも頻出する。「林塘」は白詩では散策の場（偶作一首）其「白氏文集」巻五一・二三八四であり、花を楽しむ芳景幽致の処（「日長」同上・二二八九）であつて、暑気を避けるにふさわしい塵外の地というイメージがある。

首聯の「入林」「斗薮」「滿襟」「看取」「照水」や頷聯の「池上」「樹間」「鋪設」などすべて白詩にも例がある。また、白居易が鶴を愛したこともよく知られ、丹羽氏が指摘する通り朝綱もその表現に学んでいることは間違いない。猶、第四句の背景には「青苔池上鎖殘暑」、緑樹陰前逐晚涼」（「池上逐涼二首」其一）『白氏文集』巻六六・三三六四「千載佳句」巻上・納涼一三九）あたりの句があったかも知れない。苔は『千載佳句』所収詩句でも山中・幽居・閑居・禪居といった俗外の地のイメージを醸成する役割を負うかのようだ。

頸聯の「境閑」には「偶得幽閑境、遂忘塵俗心」（「新庭樹因詠所懷」）『白氏文集』巻八・〇三七〇）の句が喚起されるが、「客熱」とは珍しい語。「閑門避暑臥、出入不相過」（程曉「嘲熱客」）と詠む「熱客」は暑い最中にやってくる客人の意だが、本詩では客人の暑気を言うだろう。「辭身去」には「金章紫綬辭腰去、白石清泉就眼來」（題「新潤亭兼酬寄朝中親故見贈」）『白氏文集』巻六九・三五八四「千載佳句」巻下・隱士九七九）の類が参考になろうし、「葉密」「松風」「松面」も白詩に見える語彙。「聞簾炎暑」（「松声」）『白氏文集』巻五・〇一九四）のが松風であり、「冷雨涼風松面秋」（韓公堆寄元九）同上巻一五・〇八六五）のように涼やかな風が顔をなでるのは心地良いものである。尾聯は避暑の飲酒として名高い「魏文帝典論曰。大駕都許使光祿大夫劉松北鎮袁紹軍、与紹子弟日共宴飲。常以三伏之際、晝夜酣飲、極醉至於無知、云以避一時之暑」。故河朔有「避暑飲」（「初學記」巻三・夏。他に「芸文類聚」巻五・伏、參照）の故事をふまえている。『白氏六帖』（巻五・酒）にも採られるものの白詩には見えない。「実無河朔飲、空有臨淄汗」（梁・何遜「苦熱詩」）は早い一例。「何必」

「古詩」「殘盃」は白詩に見えるが「晚蟬」は無く、その声が飲酒を促すという朝綱の発想は、既に記した春鳥（提壺鳥）のケースのヴァリアントであろうか。猶、蟬については「仲夏之月（中略）蟬始鳴」（『礼記』月令）とあり、夏に詠まれることも勿論あるのだが、「嫋々兮秋風、山蟬鳴兮宮樹紅」（『驪宮高』）『白氏文集』卷四・〇一四五『和漢朗詠集』卷上・蟬一九二）などのように、中国古典詩では秋の風物として詠まれる方が多い傾向にある。『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』の蟬の部立は夏部に在り、その季節を反映する詩句の殆どは本朝人の作であることもよく知られている。

五

山中自述

山中自述

碧峯遁迹臥松楹　碧峯に遁迹して　松楹に臥し
謝遣喧々世上榮　謝遣す　喧々たる世上の榮
龍尾旧行応断夢　龍尾の旧き行には　応に夢を断つべく
鶴頭新召不驚情　鶴頭の新たな召にも　情を驚かさず
商山月落秋鬢白　商山に月落ちて　秋の鬢白く
潁水波揚左耳清　潁水に波揚て　左の耳清し

『屏風十代』を読む

唯有池魚呼後至　唯だ池魚有りて　呼びたる後に至り
各随次第目知名　各おの次第に随へば　自らに名を知るならん

本詩は『扶桑集』（卷七）に所収されている（但し、第五句の「鬢」は「髯」に作る）。一首は「美しいみどりの嶺に隠遁して山家に身を横たえ、騒がしい俗世の榮利など無用と辞する。これ迄仕えていた官吏の道などすっぱり夢と思いきり、御上から新たなお召しがかかって心も動かすこともない。商山には月が傾き、あの四皓の鬚は秋を迎えて一層白く輝いていようし、潁水には波が立って、許田の左耳は汚れを洗い落としてますます清らかであろうかと思われる。ただ池にいる魚に声をかけるとやって来て、列を成して泳ぐところを見ると、魚たちが名を解しているかのように思われてならないことだ」という程の意。詩題の「自述」は「述志」に殆ど同じ。ここは「京華游俠窟、山林、隱、遯、棲」（郭璞「游仙詩七首」其一）「隱士託山林」、遁世以保真」（張華「招隱詩」）という隠遁者の心情を述べるものとみて良い。「碧峯」は「碧嶺」「碧岑」に同じ。「碧」は既述の通り清澄秀麗のイメージがあり、朝綱は他でも「慕高軫到碧峯頭」（『訪鄭處士山居』『扶桑集』卷七）と本詩同様俗

外の山居の地に用いている。「遁迹」は「惜残春」詩で採挙げた「晦迹」に同じ。「収跡、遠遁」(陸機「弁論上」『文選』卷五三)と見える李善注に「鄭玄礼記注曰。遁、逃也」とあり、

「遠公遁迹、廬山岑、開士幽居祇樹林」(李頎「題璿公山池」)「賓公遁迹、星霜久」(嵯峨天皇「贈賓和尚」)「凌雲集」などと用いられている。「松楹」は松の柱、転じて「嚴室松楹、高枕北山之北」(紀長谷雄「秋思入寒松詩序」『本朝文粹』卷一〇)のように山居(山寺や山荘)に用いられることと少ない。「謝遣」は「公乃歎謝、遣之曰。子不得仙道也」

「神仙伝」壺公「謝遣門前勞問客」(「拝官之後謝勞問者」)「田氏家集」卷下)などであるように、理由を述べ断わって去らせる、謝絶する意。「喧々」は「帝城春欲暮、喧々車馬度」(「買花」『白氏文集』卷二・〇〇八四。陶潜の『文選』にも採られた名高い一句「結廬在人境、而無車馬喧」の句をふまえる)「一身漂泊厭浮名」、試避「喧々毀譽声」(紀長谷雄「山家秋歌八首」其一『本朝文粹』卷二)に伺えるように俗世の喧騒の様であり、続く「世上采」にも「鬢雪人間寿、腰金世上采」(「初授秘監」并賜金紫閑吟小酌偶写三所懷」『白氏文集』卷五五・二五二七)の例があって、白詩の世上浮采は本

朝詩にも受継がれ詠まれている(白詩に限らぬ伝統的な認識の一つと言ってもよいだろう)。

頤聯は「龍尾」「鶴頭」と対語に拘わった朝綱らしい表現(類例は「惜残春」詩の「狼藉」と「龍鍾」の字対。前者は「已許虎溪雲裏臥、不爭龍尾道前行」(「重題」『白氏文集』卷一六・〇九七六)他白詩に頻出し、含元殿前の昇殿の道の意から官吏としての出世の道を言う。後者は「其鳴驪入谷、鶴書赴隴」(孔稚珪「北山移文」『文選』卷四三)とある李善注に「蕭子良古今篆隸文體曰。鶴頭、書手、偃波書、俱招板所用。在漢則謂之尺一簡。髣髴鶴頭」。故有「其称」と見えるように、御上からの招請状(の書体、又は簡)を指す。「新召」は(貴顕の)新たな御召し(お声がかり)ということ。「驚情」は「感時花濺淚、恨別鳥驚心」(杜甫「春望」)に同じく心のはつとすること。それを打消すことで心の揺がぬことを言っている。先に引用した「北山移文」では隱遁者周顒が御上からの招請にころっと変心して隱者の生活を棄てたのだが、ここではそれと対照的に描いているわけである。

頤聯は『和漢朗詠集』(卷下・仙家付道士隱倫五五〇)に採られた名高い句。「商山」四皓や許由の「潁水」の故事は、『史

記」(留侯世家、燕召公世家)『高士伝』や本朝の『世俗諺文』(巻下)『唐物語』(第一七話)等にも見えよく知られている。建安の詩傑曹植の「南山四皓賛」「許由頌」他、多くの詩人の隠逸詠にも詠まれ、白詩にも「答四皓廟」詩(『白氏文集』巻二・〇一〇五)等に用いられている。本朝でも馴染み深い故事であるから贅言を要しまいが、唯だ一点「左耳清」については聊か言及しておかねばなるまい。『史記』(燕召公世家)や『高士伝』或は『逸士伝』(『世俗諺文』所引)など、中国の文献には許由が耳を川で洗ったことは見えているが、それが「左」の耳であったと記すものは管見の限りでは見出せない。だが、後の『蒙求和歌』(許由一瓢)には「許由潁川ノ人ナリ。ヨヲウキコトニ思トリテ箕山ニコモリ井テ年ヲクリケリ。堯王、許由が賢ヲシリテヨヲユヅラムトキコヘケリ。許由ウキ事キ、ツト云テ、左ノ耳ヲ潁川ノ流ニアラヒケリ」と記されている。果たして中国の先行文献に言及するものがあつたものか、大方の御教示を乞うものだが、『朗詠』の古注釈上もこの点は古来の難義であつたらしく、例えば次のような説明が記されている。

古書曰。吉キ事ハ右ノ耳ヨリ入、悪キコトハ左ノ耳ヨリ入

『屏風土代』を読む

ルト云ヘリ。悪事ハ外道ノコトトテ、左リニ留ルト云。故ニ仏ヲバ右ニ廻ルト云ヘリ。(書陵部本『朗詠抄』コレニツキテ、ナド左耳トシモ云ゾト云ウタガヒアリ。口伝抄云。左耳清三字ハ古来ノ難義也。為レ対ニ秋鬚白ノ三字、強テ所求也。医書ノ中ニ云。沐浴ニハ先洗左耳ト云事ノ有也。(『和漢朗詠集永洛注』)朝綱が何故「左耳」と作つたのか結局は明らかにし難いのだが、先の『蒙求和歌』や「堯王ノ代ニ許由ト云者有リキ。世ヲ遍テ朝ニツカヘズ。而シテ堯王召シテ、九州ノ守タラント有リシヲ聞テ、悪キコトヲ聞タリトテ、潁水ノ滝ニテ左ノ耳ヲ洗ト云ヘリ」(広島大学本『和漢朗詠集仮名注』)といった「朗詠」古注の記事は、朝綱の詠に寄添うように記されたものであつて、存外「為レ対ニ秋鬚白ノ三字」、強テ所求也」というのが的を射ているのかも知れない。猶、「月落」「波揚」は殊に珍しい表現でもないが、前者は白詩に、後者は「文選」によく見えている。次いで、尾聯については魚に声をかけると名を解するように思われるという表現が面白い。後に「藻中取レ楽人誰識、波上呼レ名各自知」(藤原篤茂「床下見魚遊」『類題古詩』二〇〇)と詠まれているのも或は本詩を意識してのことかも知れない。

六

山中感懷

山中の感懷

傍無朋友室無妻 傍に朋友無く 室には妻も無し

不奈生涯与世睽 いかんともせず 生涯の世と睽ふことを

曉峽蘿深猿一叫 曉峽 蘿深く 猿一たび叫び

暮林花落鳥先啼 暮林 花落ち 鳥先づ啼く

五湖壳藥隨雲去 五湖 藥を売り 雲に随ひて去り

三徑橫琴待月携 三徑 琴を横たへ 月を待ちて携ふ

枕上心閑婦夢斷 枕上 心閑かに 婦夢断たれ

如何白首老青溪 白首の青溪に老いたることをいかにせん

本詩は『扶桑集』（巻七）に所収されている。一首は「傍に

友無く、家に妻もない。暮らし向きの世間と違うのも致し方無

いこと。曉方の峽谷の蘿生い茂るあたりに猿が一声鳴き叫び、

夕暮れの林では花も散って先ず鳥の声がひびく。范蠡のように

五湖に舟を浮かべて藥を売り雲の流れに従ひ行き、蔣詡よろし

く三本の小道のある庵にて琴を横たえ月の出を待つ。枕辺は心

静かで帰郷の夢も消えて、白毛頭で清らかな谷川の地に老いて

ゆくのをどうしたものだろうか（致し方あるまい）」という程

の意。「感懷」は感想を述べることで、白詩を含む唐代詩や平安朝詩にもよく見える。ここは山中の俗外の地に隱栖する心情を詠む。

首聯は「厨無煙火、室無妻、籬落蕭条屋舍低」（題「李山人」）「白氏文集」卷一五・〇八八九）に做ったもので、「朋友」「不奈」「生涯」（生活の意）あたりも白詩に見える語彙である。「睽」字は異体字と見るべきかも知れないが、「睽」（相反する、かけ離れている意）とありたいところ。因みに「睽」は『王仁昫刊謬補欠切韻』等にも見えない。

領聯は『和漢朗詠集』（巻下・猿四五九）に採られている。「人煙一穗秋村僻、猿叫三声曉峽深」（紀長谷雄「秋山閑望」『和漢朗詠集』巻下・猿四五八）と見える表現も参考になっただろうか。松浦友久が既に『宜都山川記』や『荊州記』に「巴東三峽猿鳴悲、猿鳴三声淚霑衣」「巴東三峽巫峽長、猿鳴三声淚霑裳」などと見えているのに注目したように、本朝の『千載佳句』（巻下・猿雁）『和漢朗詠集』（巻下・猿）『新撰朗詠集』（巻下・猿）でも巴峽猿声の哀切なイメージを搖曳させる表現を好んで摘句している。猶、「送秋千里雁、報隰一声猿」（東樓南望八韻）『白氏文集』卷二〇・一三六七）も静寂

を破る悲痛な一声を詠む例。「蘿」は「若有_レ人兮山之阿、被_二

ようか。

薜荔兮帶_二女蘿_一」(『楚辭』「山鬼」)「主人何処去、蘿薜換_二貂

范蠡字少伯、徐人也。事_二周師太公望_一、好服_二桂飲_二水。

蟬_一」(題「崔常侍濟源莊」)『白氏文集』卷五五・二六〇六)

為_二越大夫_一佐_二句踐_一。破_レ吳後乘_二扁舟_一入_レ海。變_二名姓_一

などを挙げる迄もなく、山中の俗外、隱遁者の空間を暗示しよう。「暮林」「鳥」には「日入群動息、_レ鳥鳴_二林_一」(『飲酒詩

適_レ齊、為_二鴟夷子_一。更後百餘年見_二於陶_一、為_二陶朱君_一。財累_二億萬_一、号_二陶朱公_一。後棄之_二蘭陵_一。売_レ藥。後人

二十首」其七。猶「_レ歸鳥」詩もある)と賦す陶潛詩の世界のイ

世々識_二見_一之_二云。

メージ(官界を辞し田園に生きるアウトロー)が漂い、「倦_レ鳥暮_レ林、浮雲晴_レ歸_レ山」(別_二楊穎士盧克柔殷堯藩_一)『白氏文集』卷九・〇四三三)もそれを受けたもので、本朝の「此時独恨無_二才用_一、其奈拙_レ簪入_二暮林_一」(源則忠「賦_二未飽_二風月思_一」『本朝麗藻』卷下)も朝綱同様にその表現の系譜に繋がっているとも見られるか。「落花啼鳥」については先の「惜_二殘春_一」詩で挙げた白詩「快活」の詩句が想起されよう。

「隨雲」「待月」は白詩に見え、琴と「三徑」が絡むところはむしろ、蕭統「陶淵明伝」に陶潜が「聊欲_二絃歌_一以為_二三徑_一之資」と親朋に語り、音律を解しないながらも無絃琴を撫弄すると伝えていることを意識しているのかも知れない。また、白詩にも「共_レ琴為_二老伴_一、与_レ月有_二秋期_一」(対_レ琴待_レ月)『白氏文集』卷五六・二六一九)など清夜琴興の詩が少なからずある。

頸聯は、所謂「范蠡泛湖」「蔣詡_二逕_一」(『蒙求』)の故事が喚起されるところ。但し、「扁舟」(句踐既滅_レ吳、范蠡乘_二扁舟_一泛_二五湖_一)『白氏文六帖』卷三・舟)と見えるものの、「売_レ藥」のことは『蒙求』や『史記』(貨殖列伝、越王句踐世家)にも見えないので次の『列仙伝』あたりに依ったとも考えられ

尾聯の「枕上」「心閑」「帰夢」「白首」「青溪」などはいずれも白詩に見える語彙。「郷夢有_二時生_一枕上」、客情終日在_二眉頭_一(姚揆「穎州客舎」)のように旅枕に横になれば帰郷の夢をみるものと一般に詠まれるが、本詩では隱栖の身には戻るべき故郷もなく、俗外の清澄な谷川の地に老いてゆく他ないと詠む。「青溪」は「青溪千餘仞、中有_二道士_一」(郭璞「遊仙詩

七首」其二『文選』卷二二」と詠まれる李善注に「庾仲雍荊州記曰。臨沮県有青溪山、山東有泉、泉側有道士精舍」などと見えて青溪山のこととも言うが、ここは美しい谷川の地で隱者道士の所居にふさわしい処であり、「暮与一道士、出尋青溪居」(和朝回与王鍊師遊南山下)『白氏文集』卷五二・二二七〇)「秋鶴老、暮猿啼、結交留宿旧青溪」(紀長谷雄「山家秋歌八首」其五「本朝文粹」卷一)などはいずれもそれを継承する表現である。

七

書齋独居

書齋独居

山齋蓄韻对澄江 山齋 韻を蓄へて 澄める江に対ふ
 応是洪鍾独待撞 応に是れ 洪鍾 独り撞くを待つべし
 但有閑雲歸澗戸 但だ 閑雲の澗戸に帰ること有り
 更無俗客到松窓 更に 俗客の松窓に到ること無し
 崔儼入室書千卷 崔儼 室に入る 書千卷
 范岫辞官筆一双 范岫 官を辞す 筆一双
 欲仕煙霞定嘲我 煙霞に仕へんと欲せば 定めて我を嘲らん
 莫言懷宝也迷邦 言ふこと莫 宝を懷きてまた邦を迷はすと

一首は「山中の書齋に詩篇をたくわえ、清らかな川の流れに向き合っている。きつと鐘が撞かれるのをひとり待っているのだ。のどかに空に浮かぶ雲は谷間の庵に帰ってゆくように見え、その上その松の生えた窓辺を訪れる俗人の姿もない。読書を己の務めとした崔儼の書齋に入るには(五)千卷の書物を読んでいなければならなかったという(が、ここに描かれる書齋はそれにも似ていようか)。范岫は博学多通にして廉潔をもって知られた人物だが、牙管筆一双でも費だと思つたという(が、絵の中の職を辞したらしい人物はその人のようだ)。俗事を離れ自然を楽しむ詩文に興じたいなどと言えば、定めしこの己を嘲笑する者もおろうが、あたら才を抱きつつ、お国のお役に立てずにいる、などと言わないでもらいたいのだ」という程の意。

「書齋」は「樹低新舞閣、山对旧書齋」(孟浩然「奉先張明府休沐還郷海亭宴集」)などであり、本朝の道真詩にもよく用いられている。「独居」は『文選』や『白氏文集』にも見え、本朝では「独居窮巷側、知己在南山」(淡海三船「贈南山智上人」)『経国集』卷一〇)とあるのが早い例。独り奥深い山中の庵に書物に囲まれ筆を手に行っている人物が描かれているようだ。

「山齋」詩と言へば、先ず梁・簡文帝や庾信・徐陵の作が知られ、「懷風藻」にも河島皇子・中臣大島の同題詩がある。殊に庾信の「洞壺閑・靜室」、雲氣滿「山齋」(「詠・画・屏・風・詩」二十五首)其二三に注目すれば、屏風絵の図柄としても描かれていたことが知られる。「山齋方独往、塵事莫相仍」(「山居」「白氏文集」卷一六・〇九八三)ともあり俗外の心靜かに居る場なのである。「蕃韻」はここでは詩を作りたくわえること。「吟・君七十韻、是我心所蕃」(「和・夢遊春詩」二百韻)「白氏文集」卷一四・〇八〇四)は参考になるかも知れない。「澄江」と言へば「餘霞散成綺、澄江靜如練」(謝朓「晚登三山・還望京邑」)「文選」卷一七)は古来余りにも有名で、空海「文鏡秘府論」(地巻)にも摘句されている。「洪鍾」は「文選」によく見える語で、例えば「洪鍾虛受、無來不応」(王巾「頭陀寺碑文」)「文選」卷五九)とある李周翰注には「幽深之谷、本無情。有聲至則必答之、以響。大鍾虛其体以受扣、扣來無不応之、以聲」と記される。

頤聯の「閑雲」はのどかな雲。「問人遠岫千重意、对客閑雲一片情」(李山甫「方干隱居」)「山寂歷兮春欲曠、澗幽深兮此閑雲」(滋野善永「奉和・太上天皇青山歌」)「経国集」卷

一四)などは本詩のニュアンスに合うが、「澗戸」との組合わせから、先ずは白詩の「雲生澗戸、衣袂潤、嵐隱・山厨・火燭幽」(「重題四首」其二)「白氏文集」卷一六・〇九七七)「千載佳句」卷下・山居九九二)「新撰朗詠集」卷下・山家五一四)を想起する。「澗戸」は溪谷の住居の意で、本詩に先行する例えば「雲埋澗戸、幽情積、水隔・寰中・野性閑」(「都良香」「旧隱詠懷敬上・所天閣下」)「扶桑集」卷七)「無妻澗戸、松僧老、不稅山畦黍猥生」(「題・南山」名処士壁)「菅家文章」卷四)などとの依れば、隱遁者の庵として表現されていることが知られる。その背景には先の「山中自述」詩でも言及した孔稚珪「北山移文」に周顒のうち棄てた庵が「青松落・蔭、白雲・誰侶、澗戸、推絶無・与・婦、石逕荒涼徒延佇」と描かれていたことと関係していると思われ、先の白詩も本朝詩も実はそのイメージの揺曳をうまく利用しつつ、詩句を成しているように思われるのである。次の「俗客」「松窓」とも白詩に見え、後者については「松窓倚・藤杖、人道似・僧居」(「晚庭逐涼」)「白氏文集」卷一九・一二八四)と、まま僧房のような場にふさわしいイメージが本詩に通うかと思われる。

頤聯の「崔儼」のことは「隋書」(卷七六・列伝第四一・崔

『僊伝』に見える。若い頃から盧思道・辛德源らと親交があり、読書を己が務めとしてその家の戸に「不_レ読_二五千卷_一書_一者、無_レ得_レ入_二此室_一」と大書したという『太平御覧』(巻六一六・読誦)も『隋書』所引)。ところが『文鳳抄』(巻六・文部・書)には「崔儼_二千卷_一、崔儼_二室_一、不_レ読_二書_一千卷_一者、不_レ入_一。或曰、不_レ読_二五千卷_一、不_レ入_一。(類林)」と「千卷」「五千卷」の二項が並記されている。確かに中国渡来の某書に「千卷」とする資料があった可能性も皆無ではないだろうが、本朝詩文の語彙を多く採取している『文鳳抄』の性格からすると、この項自体が朝綱の本詩句の上下二字を摘録した可能性が高いのではないかと思う。猶、この故事は朝綱のこの用例が一番早く、後に院政期に至り、惟宗孝言や藤原敦光が用いているが、それは朝綱作の影響であるかも知れない。この頸聯が『新撰朗詠集』(巻下・閑居五七七)に採られているのもその意味で興味深いものがある。

『范岫』のことは『梁書』(巻二六・列伝第二〇・范岫伝)に見える。沈約と共に文才を以て聞こえ、博涉多通で殊に前代の旧事に通じ、祠部尚書・右驍騎將軍・金紫光禄大夫に至った。『岫身長七尺八寸。恭敬儼恪、進止以_レ礼。自親喪之後、蔬

食布衣、以_レ終_二身_一。每_二所居_一居_二官_一、以_二廉潔_一著_二称_一。為_二長城令_一時、有_二梓材巾箱_一、至_二数十年_一。經_二貴遂不_二改易_一」。在_二晋陵_一、惟作_二牙管筆_一、一_二双_一、猶_二以_二為_レ費_一」とあれば儉省を尚ぶ人品であった。

尾聯の「煙霞」はもともととはあたりに立籠めるモヤの意だが、ここでは俗事を離れ自然を楽しみ、それを詠じたりすることを想起させよう。「早年薄有_二煙霞志_一、晚歲深諳_二世俗情_一」(重題「白氏文集」巻一六・〇九七〇)「明主十徵何謝_レ病、煙霞不_レ許作_二堯臣_一」(朴昂「尋_二太一王山人_一路次_二雲際寺_一」)「千載佳句」巻下・隱士九八三「新撰朗詠集」巻下・隱倫五〇九)などは、官界や世俗とは相容れない俗外の象徴として用いられ、本詩と同じ語性と言って良からうか。末句は「懷_二其宝_一而迷_二其邦_一、可_レ謂_二仁乎_一」(『論語』陽貨)をふまえたもの。魯の家臣陽貨が孔子に仕官を勧め「宝(孔子の才能)を持ちぐされにしましたま(仕えずにいて)、国人達が困惑しているのを放っておいて、それで(あなたの説く)仁の道にかなっていると言えぬのか」と説得した時の言葉で、これは『文選』(巻五一・王褒「四子講徳論」)にも見えている表現である。

八

送僧歸山

僧の山に帰るを送る

一自方袍振錫行 一たび方袍の錫を振て行きしより

別師還媿六塵情 師に別れて 還た六塵の情に媿づ

雖觀秋月波中影 秋の月の波の中の影に觀すと雖も

未遁春花夢裏名 未だ春花の夢の裏の名を逃れず

谷靜纔聞山鳥語 谷靜かに 纔かに聞く 山鳥の語

棧危斜踏峽猿聲 棧危く 斜めに踏む 峽猿の聲

夜深莫歎忙歸路 夜深きも 歎くこと莫 歸路に迷へること

を

定有霜鍾度嶺鳴 定めて霜鍾の嶺を度りて鳴ること有らん

一首は「師僧が錫杖を振ってお歸りになってからというもの、

師に別れたことでやはり様ざまな世俗の汚れにまみれてしま

己の心が恥ずかしくてならぬ。秋の月が水面に映つて波に美し

く澄んでいるが、その月は実体のないものだ（一切のものには

実体がないという水月觀）などと思ひなしても俗世から脱する

ことはできず、相も変わらず夢中の春の花の如き実なき虚名を

求めてしまう始末。（師僧の歸る）谷間は静かでわずかに山鳥

の聲が聞こえるばかりであらうし、懸け渡した危い橋を峽谷にひびく猿の声を下に聞きつつ渡られることだろう。夜更けて歸路に迷われてもお歎きになりませんように。きっと明け方の霜に鐘が峯を渡って自らに鳴り（導かれて寺に歸れ）ましようから」という程の意。

下山していた僧が再び山寺に歸って行く様を詠む句に「蒼苔

路滑僧歸寺、紅葉声乾鹿在林」（溫庭筠「宿雲際寺」）「千

載佳句」卷上・山中三四五「和漢朗詠集」卷上・鹿三三四

「重疊煙嵐之斷處、晚寺僧歸」（張說「閑賦」）「和漢朗詠集」卷

下・僧六〇四）等があり、猶存住寺僧、肯有歸山客二

（過「紫霞蘭若」）「白氏文集」卷八・〇三四四）は白居易自身

が「山寺に歸って来たぞ」と詠むもの。

首聯の「方袍」は「白衣」居士、方袍四道人」（題「天竺南

院贈閑元旻清上人」）「白氏文集」卷六三・三〇四〇）と見

え、朝綱は願文や諷誦文（「本朝文粹」卷一四）でも用いてい

る。猶、「振錫」「別師」「六塵」も白詩に見える語である。

領聯は「和漢朗詠集」（卷下・無常七九四。但し題を「送

歸山僧」とするものもある）に採られた所謂水月觀（十喻

の一）を詠んだもので、「毎夜坐禪觀水月、有時行醉翫

風花」(『早服雲母散』)『白氏文集』卷六四・三二三〇)と白詩にも見える。『朗詠』の永済注に「上句ハ維摩經云、此身如水中月ニ云々」、「書陵部本朗詠抄」に「下句、春花開クカトスレバ散リヤスシ、生死ノ夢中ニタゞヨエル有様、花ノ開落ニ喩タリ」などとある。また、「夢裏」には諸注の指摘通り「壺中天地乾坤外、夢裏身名目暮間」(元稹「幽棲」『千載佳句』卷下・仙境一〇七四『和漢朗詠集』卷下・仙家付道士隱倫五四〇)が意識されているようか。この聯では師僧と対面していた幽棲者の内なる心情を記し、次聯では帰路の師僧に想いを馳せるという展開になっている。

頸聯の「山鳥」「峽猿」(六「山中感懷」詩の対も参照)について、前者は山寺や幽居を詠む「野猿疑_レ弄_レ客、山鳥似_レ呼_レ人」(『遊宝称寺』)『白氏文集』卷一六・〇九五)「一声山鳥曙雲外、万点水蛭秋草中」(許渾「早秋幽居言志尋同志」)『千載佳句』卷上・早秋一五六『和漢朗詠集』卷上・郭公一八二)の作に見え、後者は「山鬼趨跳唯一足、峽猿哀怨過三声」(『送客之湖南』)『白氏文集』卷一六・〇九四八)と旅路の哀愁をかきたてるものであった。帰途の僧のたどる道は旅と言うには大仰だが、危うい懸橋や夜道の闇に不安と孤独を

想像_{おもひや}っているのである。

多くの語が白詩に見える中で、尾聯の「霜鍾_{しもかね}」については用いられていない。だが、「秋_{あき}至_{いた}含_{こめ}霜動_{しもふり}、春婦応_{こたへ}律鳴_{りつ}」(李嶠「鐘」)と詠まれる「鐘鳴_{かねなり}」(山海經曰。豊山有_あ九鐘_こ、是知_し霜鳴_{なり}。郭璞注曰。霜降則鐘鳴。故言_レ知也。)(『初学記』卷二・霜)の故事は、「欲_ほ和_へ豊嶺鐘声_{しやう}一否_ふ、其_{その}奈_な華亭鶴警_{きやう}何_{いかん}」(兼明親王「夜月似秋霜」)『和漢朗詠集』卷上・月二五〇)他本朝ではよく詠まれるようになるのである。

九

問_と春

春_{はる}に問_とふ

山吐雲晴樹競粧_{よもぎ} 山の吐_{はき}し雲も晴れ 樹は粧_{よもぎ}を競_きひ

高低無処不添光_し 高きも低きも 処として光を添へざるは無

再三請問得知否 再三 請ふ問へ 知るを得るや否や_{いな}
何故猶殘鬢上霜 何故か 猶し鬢上に霜を残せると

一首は「山から出た雲も晴れ渡り、木々は春の粧美を競い合
い、高きも低きも大地のすべてが春のうらかな光を帯びてい
る。何度でも春に尋ねてみなさい、知るや知らずや、(春とい

うのに）一体どうして（自分の）髪は霜のような白毛を残したままなのか、と」という程の意。季節を擬人化してかく詠むのも「問秋光」（『白氏文集』巻五二・二二七八）の類だろう。恐らく絵には春光あふれる景の下に白髪の老人が描かれ、それに春の生気に浴しえぬ身のつばやきを感じ取って詠んだものだろう。

「雲無心以出岫」（陶潜「歸去來辭」『文選』巻四五）と雲は山から湧くものと詠まれ、「山吐晴風、水放春光」（代春贈）『白氏文集』巻二六・〇九一五」という表現もある。第二句は「春變煙波色、晴添樹木光」（又和令公新開龍泉晋水二池）『白氏文集』巻六七・三三五九）などという表現を繼承していることになろうか。第三句以下の「再三」「請問」「知否」「何故」なども白詩に見えるが、特別な語彙ではなく、鬢毛を「身似浮雲鬢似霜」（送蕭処士遊黔南）『白氏文集』巻一八・一一四二）と霜に鬢えるのも白詩のみに限らぬ表現の類型と言って良からう。

十

七夕代「牛女」 七夕に牛女に代はる

『屏風十代』を読む

独坐青樓漏漸深 独り青樓に坐し 漏漸く深し
支頤想像曉來心 頤を支へて想像る 曉來の心
風從昨夜声弥怨 風は昨夜よりして 声は弥よ怨み
露及明朝淚不禁 露は明朝に及んで 淚禁へず
一首は「独り樓台にすわり夜もまさに更けた頃、頬杖ついて夜明け前の牛女の心に思いを馳せる。昨夜来の風は（牽牛織女の離別の）悲しみの声を乗せていよいよ怨みがましく吹き来る。露は二人の涙さながらに明方に降り敷き、（自分も）涙をこらえきれずにいる」という程の意。

「七夕」詠は六朝以来数多く、「七夕詠牛女」詩題は枚挙に遑い。「代——」にしても「代牽牛」「答織女」（梁・王筠）「代織女贈牽牛」（沈約）などがあり、本朝の『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』の「七夕」には「代牛女惜曉更」「代牛女待夜」「代牛女言志」題の詩句が見え、後の源経信には「七夕代牛女」（言志）題の和歌も残る。

第一句「独坐」「青樓」（女性の住む美しい樓閣）は白詩に見え、「漏」は水時計のことで「渚宮東面煙波冷、浴殿西頭鐘漏深」（八月十五夜禁中独直對月憶元九）『白氏文集』巻一四・〇七二四『新撰朗詠集』巻下・禁中四七九）というに殆ど

同じ。第二句「支頤」は支頤に同じく頤杖をつくことで、思いにふける時の仕草。「薄晚支頤坐、中宵枕臂眠」(「徐夜」『白氏文集』卷一六・〇九五八)などの白詩他、元稹・劉禹錫にも見え、島田忠臣や菅原道真などにも用いられて、「つらづゑ、つきていみじくなげかしげに思ひたり」(『竹取物語』)のように仮名文学へと定着していった。「曉來」は白詩に見え、「想像」は見えないものの六朝以来の語。第三句の「風」はここでは「怨咽双念斷、悽悼両情懸」(梁武帝「七夕詩」)「通宵道意終無_レ尽、向_レ曉離愁已復多」(何仲宣「七夕賦」詠成_レ篇)などと詠まれる離別の怨みの声を運んで来る秋風。第四句「露」は「夕夜清露_レ濕、晨驚秋風_レ前」(韋応物「七夕」)「露白風清夜向_レ晨、小星乘_レ佩且埋_レ輪」(唐彦謙「七夕」)などと秋風と共に詠まれるが、その露を涙とオーバーラップさせて効果を挙げようとするあたりが本朝詩らしいこまやかな点かも知れない。

十一

楼上追_レ涼

楼上に涼を追ふ

煩熱蒸人不異炊

煩熱

人を蒸して

炊ぐに異ならず

登楼快被遠風吹 楼に登り 快く速くよりの風に吹かる
凜然還有衣裘想 凜然として 還て 裘を衣_きんとの想ひ有り
安用袁宏一扇為 安ぞ 袁宏が一扇を用_{もち}て為_なん
一首は「うっとおしい熱さは人を蒸し上げるようで、飯をたぐのに変わらぬありさま。そこで楼台上に登り、速くより来る風に心地よく吹かれる。すると身のひきしまる寒さに襲われ皮衣を着たいと思う程だ。これなら何もあの袁宏の団扇など要しまい」という程の意。

「追涼」(「逐涼」に同じく涼を求める意) 詩は水辺のことが多いのだが、楼上のそれについては丹羽氏が言及された「何処堪_レ避暑」詩(『白氏文集』卷八三・三〇三六)は勿論「清涼近_レ高生、煩熱委_レ静銷」(「月夜登_レ閣避暑詩」『白氏文集』卷一・〇〇二三)などもある。「煩熱」は道真も用いている(「夏日偶興」『菅家文章』卷二)が、人を蒸し上げて炊飯にも異ならないとは聊か遊戲に走った表現か。第二句の「遠風」も六朝詩に例あるが、「飛鳥滅時宜_レ極目、遠風來_レ処好開襟」(「菩提寺上方晚眺」『白氏文集』卷六四・三一二七)をここでは意識しているはずである。第四句の「安用——為」には例えば「九重天子不_レ得_レ知、不_レ得_レ知、安用_レ台高百尺_レ為」(「司天台」『白

氏文集」卷三・〇一三五)の用法が喚起される。袁宏の故事は丹羽氏が指摘するように『晋書』(卷九二・袁宏伝)や『世説』(言語第一・83話)等にも見えるが次の記事を挙げておこう。

統晉陽秋曰。謝安賞袁宏機對并速。後宏出為東陽郡、時賢祖道治亭。安起執宏手、顧就左右、取二扇、

授云、聊以贈行。宏心聲答曰、輒當奉揚仁風慰中彼黎庶。合座稱其率而当。(『芸文類聚』卷八九・扇)

謝安に団扇を贈られ、即座に「この扇で徳風を天下に起こし人民を慰撫しましょう」と機敏な應對をした逸話である。本詩の場合(袁宏の言う官人としての政教の意味あいを否定する含意も多少はあるかも知れないが)単に扇に関わる故事を採挙げたという印象を拭えないのは稿者の読み込み不足故であろうか。

むすびに

『屏風士代』の漢詩は従来から言われているように、屏風絵をもとに作られたものと思われる。恐らくは漢詩から想像するに絵柄は唐絵であつたろうと思われる。それはこの時代(村上天皇の御代)からすれば何の特別なことでもない。朝綱の詩は既に丹羽氏に依り指摘されているように、白居易詩の影響を強

く受けている。その白詩の佳句を最も多くピックアップした『千載佳句』(同族の大江維時撰)所収句を如上のように多く引用するに至ったのも恐らくは偶然ではないだろう。尤もそれ以外に菅原道真の詩表現や『文選』の語彙なども顔をのぞかせていた。そして、何より本作の多くが『和漢朗詠集』に摘句されていることも関わるだろうが、後世にも少なからぬ影響を与えているようであることも記しおかねばなるまい。詩の解釈についての管見は大概以上の如くであるが、実はもう一点、即ち字様(殊に異体字)の位相についても考える必要があるように思う。それについてはまた機会を改める他ないようだ。

注

(1)「大江朝綱『屏風士代』詩の白詩受容」(『白居易研究年報』第八号、勉誠出版、二〇〇七年九月)。

(2)「宮廷文学と書——「三蹟」と詩人をめぐる劄記——」(仁平道明編『王朝文学と東アジアの宮廷文学』竹林舎、二〇〇八年五月)。

(3)以下の引用に当たっては新潮社日本古典集成成本(大曾根章介・堀内秀晃校注、昭和五十八年九月)を用いた。猶「千載佳句」については金子彦一郎の翻刻(『増補平安時代文学と

白氏文集——句題和歌・千載佳句研究篇——』芸林舎、昭和五二年五月覆刻版）に依っている。

- (4) 本朝の早い例「酹落花」落花迸灑不_レ折_レ地」（滋野貞主「奉和御製江上落花詞」雑言奉和）は花弁を表現するもので、白詩同様視覚的に把握される事象に使われている点でやはり朝綱作とは異なると言わねばなるまい。

- (5) 詳しくは研究史をふまえた近年の論に、三木雅博氏「句」字と「にほふ」——菅原道真と和語の漢字表記——（『文学史研究」第三号、一九八二年二月。『平安詩歌の展開と中国文学』〈和泉書院、一九九九年一〇月〉収録）、朱捷氏「句」という字の由来及びそこからみる日本人の嗅覚と中国人の嗅覚」（『同志社女子大学 日本語日本文学」第一〇号、平成一〇年一〇月）「再び「句」という字の由来について」（『同志社女子大学 学術研究年報」第四九巻Ⅳ、一九九八年一二月）があるので参照されたい。
- (6) 「白楽天の「提壺鳥」の詩と平安朝漢詩」（大手前女子大学 論集」三二号、一九九八年二月）。
- (7) 鶯の老いた声という表現については北山田正氏「老鶯と鶯の老い声」（『神女大國文」第一九号、平成二〇年三月）参照。

- (8) 澤崎久和氏「招客」の詩——白居易詩の表現——」（『白居易研究年報」五号、二〇〇四年八月）参照。

- (9) 以下は黒田彰氏他編「和漢朗詠集古注釈集成」（全四冊、大学堂書店、一九八九年一月—一九九七年六月）に依る。

- (10) 「猿声考」（『詩語の諸相——唐詩ノート——』研文出版、一九八一年）。

- (11) 猶、范蠡の故事の演変については山田尚子氏「拡大する范蠡像——商人と釣翁——」（『和漢比較文学」三二号、平成一五年八月）参照。

- (12) 本稿校正中に、後藤昭雄氏「平安朝における「文選」の受容——中期を中心に——」（『文学」第一〇巻第三号〈特集Ⅱ 日本漢詩のエートス〉二〇〇九年五月六日、岩波書店）の論に接した。それは「北山移文」の本朝における享受の様相を詳述したもので、「山中自述」詩で稿者が言及した「鶴頭」のことにも触れ、「書齋独居」詩の「潤戸」「俗客」、その第七句の表現も孔稚珪の表現に倣ったものであると指摘しておられるので是非参照されたい（末尾に倉卒な付注で対応せざるをえなかったことをお詫び申し上げる）。